

地図と国境

関本照夫

私のマレーシアとの関わりは、マレー半島のジャワ人移民調査からはじまった。1987年のことである。ジャワ人移民と言っても、最近の出稼ぎ労働者ではなく19世紀末からの移住者のコミュニティーである。ジョホールからペラまでの半島西海岸にはもう1世紀以上続くジャワ人のコミュニティーが多い。マレーシア国民大学の先生の紹介で調査に入ったのは、スランゴール州北西端サバ・ブルナム地区の農村であった。この地区は海岸に潮州人の漁村が並んでいるほかはジャワ人が圧倒的多数を占め、村々の日常会話はジャワ語、地区の役人も警官もジャワ人だった。とりわけ老人たちは、私がインドネシアのジャワ人社会で長く調査をしていると言うと大いに興味をもってくれて、ジャワ島のようすをさかんに聞きたがったものだった。その後私は南米スリナムのジャワ人コミュニティーにも調査に出かけた。マレーシアに行く前にはアメリカでさまざまな出自の移民とつきあったことがあった。だが、このマレーシアでの経験は、そのどちらともちがっていた。

今日のサバ・ブルナムで、ジャワ人住民はジャワ語を日常もちい強いジャワ人意識をもつ。と同時にまた、近代国家マレーシアのマレー人でもある。英領植民地時代の行政官の報告には、ジャワからの移民はマレー語ができず、孤立し不利な立場にあるとの記述もみつかるとは。だが少なくとも現在では、ジャワ人であることとマレー人であることとの間には葛藤がない。マレーシアの主流民族たるマレー人であることに問題はなく、ジャワ人のアイデンティティをもっていることにも、とくに構えた様子はない。彼らの前では、私が抱いていた移民とホスト社会、マイノリティーとマジョリティーといった二元論図式は、いとも簡単に崩れてしまう。彼らを見ている限り、マレーシアは移民国家、フロンティア国家であると思えてくる。北のクダールや半島東海岸で調査に入っていたら、おそらくまたちがうマレーシア像を抱くことになったのだろう。ジャワ人の一世がマレー半島に渡ってきたのは、すでに英領マラヤと蘭領東インドの国境が成立した後だから、国境を越えた移住には違いない。だが、近代国家の国境を越えて移住した人びとを、すべて移民というラベルで印しづけるのは適当ではないようだ。

数年前、ジャカルタに行くため成田発—ジャカルタ経由—デンパサル行きの飛行機に乗った。ジャカルタの空港に着陸する寸前、私の前の席に座った日本人の若い男女がこんな会話をしていた。

女「ねえ、私たちバリに行くのに、なんでインドネシアに寄ってかなくちゃいけないの。」

男「そんなこと言ったって、インドネシアに行く人もいるんだから、しょうがないじゃないか。」

もうひとつは数ヶ月前、東京の喫茶店での経験である。やはり若い男女が、どうも就職試験の常識問題の勉強をしているらしい。男は自信たっぷり、女に教えてやっている風である。

女「ああ、えーと、マレーシアってどこだっけ。」

男「ほら、東南アジアの国だよ。ASEAN ってあるだろう。あの、バリ島のある国だよ。」

女性はそれで納得したようだった。

そのとき私は、どちらの会話にもおもわず吹き出してしまった。だが、マレーシア、インドネシア、バリといった地名がひとかたまりに認識され、「国境はどこ」「どれは国でどれは一地方にすぎないのか」などと、やかましく気にしていない方が健全である場合もあろう。私自身は小さい頃から今まで、地図を見るのが大好きなのだが、地図を作り国境線を引き、国ごとに色分けしといった作業は、近代国家の妄想、とりわけファシストや参謀本部が熱愛する仕事なのかも知れない。